

アレクサンドロス大王東征における兵站の問題 －未完の帝国のロジスティクス－

■ 高橋 克秀

▶ 要 旨

マケドニアのアレクサンドロス大王（在位前 336～323）によるペルシア侵攻は最終的にインドにまで達し、古代世界において空前の大帝国が出現した。世界史にひとつの画期をもたらしたこの東征以後の時代をヘレニズム時代と呼ぶ。

この大帝国は 10 年余りで形成された。この間、東征軍は連続的に戦闘を続け、エジプトを占領し、ペルシア帝国を滅ぼした。東征軍は冬季の宿営期間を除き、間断なく軍事行動を続けた。このように長期にわたって組織が維持され、連続的に高い水準で稼動できたのは軍事行動の下部構造を支える効率的な兵站システムがあったからだ。

東征軍は驚異的なスピードで行軍した。しばしば、敵の想像を上回る速度で悪路や砂漠を踏破して機先を制し、有利な陣地を確保している。このため、敵は戦闘準備が整わず、逃亡することもしばしばであった。

軍事的に見れば、行軍が迅速であったがゆえに、長距離かつ長期間にわたる作戦が持続可能になった。行軍に時間がかかれば、それだけ食糧や水の確保が困難になり、敵の攻撃を受けるリスクも高まる。ひとつの場所にとどまる期間が長くなれば、その地域の糧食を消費し尽してしまうリスクも高まる。スピードは行軍距離を最大化すると同時にリスク最小化のカギであった。

こうした敏速さを支えたものは何だったのかをロジスティクス（兵站）の観点から検討する。本稿におけるロジスティクスとは軍事作戦に必要な輸送・宿営・糧食・武器・人馬の補給管理や傷病者の処置などを総称する。

▶ キーワード

アレクサンドロス大王 東方遠征 ロジスティクス 糧食 コンパクトな行軍 迅速性 リスク マネジメント

1. 迅速な行軍と不安定な統治
2. エンゲルスによる先行研究
 - 2.1 兵士・従者・駄獣
 - 2.2 行軍のスリム化
 - 2.3 補給

3. マケドニア軍の行軍
 - 3.1 コンパクトな行軍
 - 3.2 行軍の速度
 - 3.3 リスクの軽減
 - 3.4 糧食の確保
 - 3.5 誤算と危機
 - 3.6 技術革新
 - 3.7 兵士の補充と除隊
 4. 兵士の食生活
 5. 資金調達と富の分配
 - 5.1 兵士の雇用コスト
 - 5.2 ペルシアの資産接収
 - 5.3 富の分配
 6. おわりに～未完の帝国
- あとがき

1. 迅速な行軍と不安定な統治

マケドニア王国のフィリッポス 2 世の子アレクサンドロス大王（前 356 年－前 323 年）は、前 334 年、マケドニアとギリシアの連合軍を率いて東方遠征に出発した。連合軍はイッソスの戦い（前 333 年）でペルシア王ダレイオスを破り、エジプトに侵攻した。ついでアルベラの戦い（前 331 年）でアケメネス朝ペルシアを滅ぼした。さらに、大王はイラン高原に深く攻め入り、中央アジアを経てインド北西部まで到達して空前の大帝国を形成した。ところが前 323 年に大王が急死すると後継者をめぐって激しい争いが始まり帝国は一瞬にして瓦解した。

アレクサンドロス東征は、後世の史家や哲学者からさまざまな評価を受けてきた。19 世紀の大哲学者ヘーゲルは『歴史哲学講義』（長谷川宏訳、岩波文庫版）において「アレクサンダーの事業は、その内容からすると、想像力のもっとも広大な、もっとも美しいものといえるが、その結果からすると、ふくらんだ理想が直ちにしぼむような観があります」（上巻 174 ページ）という。アレクサンドロスの死後ほどなくして泥沼のディアドコイ（後継者）戦争が始まって帝国は分裂した。ヘーゲルはアレクサンドロス東征よりもカエサルのがリア征服のほうにより大きな世界史的意義を認めている。

たしかに、アレクサンドロスのアジア侵攻はペルシア帝国を崩壊させた。しかし、その後継国家たるアレクサンドロス帝国の大王急死による崩壊は、ギリシアが衰退期に入る決

定的な契機となり、マケドニアも地方勢力に転落するきっかけとなった。マクロ的にみれば、ペルシア帝国とアレクサンドロス帝国の連続的な崩壊は東方からローマへと世界史的重心が移行するきっかけになったことは否定できない。

同時にヘーゲルはアレクサンドロスの軍事・兵站について「彼は戦闘に関しては偉大な司令官であり、行軍や配列に関しては賢明であり、敵味方いりみだれる戦場では勇敢この上ない兵士でした」（下巻 87ページ）とミクロ的な評価を忘れてはいない。大哲学者ヘーゲルが軍事指揮官の能力のなかに行軍などロジスティクスに関する能力も含めて評価していることは興味深い。

19世紀半ば以降、ドイツではアレクサンドロス大王のなかに、国家統一の理念や西洋文明の優位を投影し、帝国主義の正当化に利用する傾向が強まった。東西文明融合という「理想化されたヘレニズム」が喧伝され、その先鞭をつけたアレクサンドロスも神格化された。

第二次大戦後は、こうした傾向に対する批判が強まり、厳密な原典研究へと方向は転換した。現在は、大王の事績をミクロな目で眺め、比較的短い時間軸の中で評価しようというミニマリズムが定着している。⁽¹⁾

本稿で注目するのは、ヘーゲルも指摘するアレクサンドロス軍の賢明な行軍と配列である。アレクサンドロス軍はマケドニアを進発してからインドにいたるまで10年以上も連続的に戦闘を続けた。一般にゲリラ戦であれば長期戦も可能だが、アレクサンドロス正規軍は冬季の宿営期間を除き、間断なく軍事行動を続けている。最終的にインドでは兵士たちの疲労によってそれ以上の侵攻は断念されたとはいえ、10年にわたって軍事組織が維持され、連続的に高い水準で稼働できたのはなぜか。そこには軍の下部構造を支える効率的な兵站システムがあった。

東征の記録において目を奪われるのは、征服地域の広大な面積もさることながら、行軍の驚異的なスピードである。大王軍はしばしば、敵の想像を上回る速度で悪路や砂漠を踏破して機先を制し、あるいは有利な陣地を確保している。このため、敵は戦闘準備が整わず、戦わないで逃亡することもしばしばであった。

軍事的に見れば、行軍が迅速であったがゆえに、長距離かつ長期間にわたる作戦が持続可能になり広大な領域を転戦できたのである。行軍に時間がかかれば、それだけ糧食や水の確保が困難になり、敵の攻撃を受けるリスクも高まる。ひとつの場所にとどまる期間が長くなれば、その地域の糧食を消費し尽してしまう可能性も高まる。スピードは行軍距離を最大化すると同時にリスク最小化のカギであったと考えられる。

こうした俊敏さ（英 agility, 仏 agilité）を支えたものは何だったのか。本稿では、ロジスティクス（logistics）の観点から検討する。ロジスティクスは通常、兵站（へいた

ん)と訳される。本稿では、軍事作戦に必要な輸送・宿営・糧食・武器・人馬の補給管理や傷病者の処置などを総称する。戦略と戦術の基礎が補給 (supply) であることは古くから認識されていた。

クセノポンはソクラテスを引用して、「陣列配備は將軍学の一小部分に過ぎない」という。「なぜかという、將軍は戦争のための軍備一切をととのえ、そして兵士たちに糧食を供給できなくてはならぬ」からだ。⁽²⁾

軍事戦略という上部構造は、軍隊の衣食住など下部構造に支えられている。いかに完璧な作戦計画であっても、食糧や水が不足して兵士や馬が動かなくなれば机上の空論となる。理想や戦略など形而上的なことがらも結局は形而下のことがらに規定されるのである。

ただし、アレクサンドロスのひとつの場所に留まることのない迅速な行動は、広大なペルシアを表面的にしか統治できないという政治的逆説を産んだ。占領地域で確固たる支配を確立する前に次の目標に移動しなければならなかったからである。森谷公俊は「大王の変転きわまりない所在地がその時々々の首都であり、帝国は捉えどころのない流動体」で「大王という唯一の支点を失えば、たちまち瓦解するしかない」という。⁽³⁾ 広大なペルシアや中央アジアに安定した統治機構を整備するには時間が足りなかった。アレクサンドロスの帝国は、軍事的な勝利とは裏腹に政治的には未完の帝国であったと評価できるだろう。

ピエール・ブリアンは、「およそ10年の間、アレクサンドロスはダリウス大王とその軍隊を打ち破っただけでなく、帝国がもたらす富を再編成した。しかし、この成し遂げたことの大きさもそれ自身の脆弱さを覆い隠すことはできない」と冷静な評価をしている。⁽⁴⁾

以下、第2節ではアレクサンドロスのロジスティクスに関してドナルド・エンゲルスによる画期的な先行研究を概観する。第3節では、アッリアノスの記述を中心に、マケドニア軍の兵站を検証する。第4節では、クセノポンの『アナバシス』の記述から、古代の兵士たちがどのように糧食を確保し、食事をしていたかミクロ的に考察する。第5節ではクルティウスの記述を中心にして、アレクサンドロスの行軍と兵站の貨幣的側面に焦点をあてる。第6節はまとめと今後の課題である。

2. エンゲルスによるロジスティクス研究

アレクサンドロス東征軍のロジスティクスに関する系統的な研究は少ない。その理由は、東征の「正史」ともいべきアッリアノスの著作のなかに、兵站に関する記述が断片

的にしか現れないからである。古代史家のサイドボトムは「兵站のことは、古代の文献でも論じられないことが多い。通常、兵站は—アレクサンドロス大王がガドロシア砂漠を横断したときのように—事態が致命的なまでに悪化したときに言及された」という。⁽⁵⁾

アッリアノスの記述は、戦闘の場面が極めて詳細であるのに対して、兵站に関する意識は希薄である。おそらく、アッリアノスが参照したアリストブロスとプトレマイオスの記録にも僅かな記載しかなかったものと思われる。

このように資料が絶対的に不足する中で、理論的に東征軍の兵站を復元しようとしたのが Donald W. Engels である。*Alexander the Great and the Logistics of the Macedonian Army* (University of California Press) は 1978 年の出版だが、今日までこれを凌駕する研究は存在しない。

エンゲルスの特色は、謎の多かったアレクサンドロスの兵站戦略を基礎的なデータの積み上げで算術的に明らかにした点にある。本節では、エンゲルスの議論をたどりながら、行軍の具体像を明らかにする。

2.1 兵士・従者・駄獣

古代の行軍は戦闘員だけで構成されているわけではない、最高指令官以下、将軍、さまざまなランクの兵士、従者、戦闘用動物、運搬用動物、女、子供、商人、占い師、役者、学者、記録係、医者、技術者、歴史家、詩人、哲学者、道案内、退役した老兵、要人の護衛官、捕虜、奴隷、外国人など多様な要素から成り立っていた。ただし、アレクサンドロスは、遠征の初期段階では女、子供を行軍に帯同させることを禁じた。⁽⁶⁾

アレクサンドロスは行軍をコンパクトにすることに最大限努力した。それにもかかわらずインドからの帰途には船を二千艘も必要とするまで行軍が巨大化していた。これは、東征が長引くにつれ、厭戦気分が高まった兵士をつなぎ止めるために現地での結婚を認めたことが主な理由である。肥大化した軍隊はイラン南部のガドロシア砂漠で、水と糧食不足のために地獄の苦しみを体験する。この点は、2.6 で論じる。

ともあれ行軍において決定的に重要なポイントは糧食と水の確保である。アレクサンドロスは、兵士の生存と士気の維持のために、兵站に最大限の目配りをしなければならなかった。⁽⁷⁾

エンゲルスの試算によれば、東征軍が一日当たり必要とする穀物の量は膨大である。まず、人間 6 万 5 千人がそれぞれ 3 パウンド必要とするので 19 万 5 千パウンド (約 8 万 8 千 kg)。騎兵隊の馬が 6 万 1 千パウンド。荷物を運ぶ駄獣が 1 万 3 千パウンド。糧食を運

ぶ駄獣が約1万1千パウンドで合計約28万パウンド（約12.6トン）となる。

駄獣として使われたのは、馬、ラバ、ラクダである。ロバは持久力がなく、牛は速度が遅いので使われなかった。行軍の制約条件は、人間だけでなく動物が大量に消費する水と食料であった。これが行軍の規模と宿営地を規定し、ルートにも影響をあたえた。大量の糧食を運ぶためには、多くの馬やラバが必要になるが、動物の数が多くなると隊列が延び、行軍のスピードが落ちて機動力を失う。敵の攻撃にさらされるリスクも高まる。

エンゲルスの研究で重要な点は、糧食も馬の秣（まぐさ）も水もない地域では、軍隊は物理的に4日以上行軍できないことを明らかにしたことである。⁽⁸⁾さらに、どれほど多数の駄獣を用意して糧秣を運ばせても、それだけでは14日以上補給は不可能であることを算術的に証明した。なぜなら多数の駄獣が自ら秣（まぐさ）を大量に消費してしまうからである。要するに、人間のために大量の糧食を携行しようとする多数の駄獣が必要となり、そのために駄獣が消費するための大量の秣（まぐさ）を携行しなければならないという矛盾に陥ってしまうのである。

しかし、実際にはアレクサンドロス軍は、多くのケースでこの制約を越えて行軍している。とくに東征の前半（バビロン入城まで）は糧食の確保にそれほど苦労した形跡はない。しかし、後半は飢えと渇きに苦しむことが多かった。この理由を解明するのがエンゲルスの研究の主目的であった。

2.2 現地での補給

糧食の制約によって14日以上作戦行動が困難だとすると東征軍はどのようにこの条件を乗り越えたのだろうか。小アジアにおいてしばしば見られたのは地元の支配層や有力者からの糧食の提供であった。多くの場合、こうした支配層はアレクサンドロスの攻撃を避けるために事前に降伏し、人質や糧食を提供することで破壊と虐殺を免れようとした。アレクサンドロスは無抵抗の地元有力者に対しては基本的に従来通りの支配権を安堵したため、この方式による糧食の確保は上手くいった。⁽⁹⁾

しかし、行軍がイラン高原に入ると地元民の抵抗は非常に頑強になった。事前に降伏してくる有力者はいなくなり、糧食の確保は次第に困難になった。元来アレクサンドロスは作戦行動において非常に慎重であり、進軍前に地理、地形、気候、農作物の状態などの情報を十分に入手することに神経を使った。このため事前に投降者や協力者がいない地域に全軍を投入するようリスクを冒すことはなかった。

このような場合にとられた手段は、軍を小さな部隊に分割して、その小単位ごとに糧食

を探索、自活させ、その情報を集約して、なんとか全軍の必要量を確保した。反マケドニアの気風の強いイランの山岳地帯では、従来のように売買や贈与、徴発という手段は通用しなくなった。糧食の確保は抵抗した都市や村落に対する略奪や強奪を伴う凄惨なものになっていく。

せっかく糧食の所在を確認できても、陸路で輸送するのは困難が大きかった。それが可能だったのは、駐屯地からせいぜい60~80マイルの範囲であった。⁽¹⁰⁾このため、冬営をする場合には河川交通が利用できて、人口が多く、できれば農産物が豊かな地域が選ばれた。サイドボトムによれば、「冬の戦争が好まれなかったのは、兵士を悪天候から守るといよりは、飼料が入手できないことと物資の運搬が困難であることゆえであった。古代においては、陸路の輸送は時間がかかり、能率が悪かったので、大量の物資の輸送には水路が好まれたが、海路は冬はとくに危険が大きかった」という。⁽¹¹⁾

2.3 行軍のスリム化

マケドニア軍はフィリッポス2世（在位前359年-前336年）の治世に大幅に強化されてエーゲ海世界で最強となった。フィリッポス2世の大きな功績はテッサリアを事実上併合して、兵士の供給源としたことである。テッサリア兵は東征軍のなかでも、つねにマケドニア兵と共に行動し、すべての戦闘において主力部隊として活動している。また、トラキアも事実上の属国となり、アレクサンドロスの東征軍に多数の兵士を供給することになった。これに対して、コリントス同盟から集められたギリシア人兵士たちは、ほとんど後方部隊として使われた。⁽¹²⁾戦力というよりも人質としての意味が大きかった。

ロジスティックスの観点からは、マケドニア軍は同時代のギリシア軍やペルシア軍とは大いに異なっている。ギリシア軍では従者の数が兵士の数に匹敵していた。⁽¹³⁾なぜなら、武器と甲冑は従者か駄獣が運んでいたからだ。

ペルシア軍は女性を多数同行していたようである。ヘロドトス『歴史』（Ⅶ. 83.2）によると「幌馬車に美しく着飾った妾婢多数を載せて同行し、さらに他の部隊の食糧とは別に、ペルシア人専用の食糧を駱駝やその他の荷曳用の獣に運ばせていた」という。ギリシア軍やペルシア軍では、兵士が武器や食糧を運ぶ負担は軽かったが、その分、輸送部隊が肥大化し、速度と機動性が犠牲になった。

フィリッポス2世は、兵士を鍛え上げ、具足一式と自分の糧食を兵士自身が運ぶことによって、非戦闘員である従者の数を減らして行軍をスリム化した。荷車の使用も最小限にし、基本的には人間が装備も運んだ。荷車は壊れやすく、木材のない地域では補修ができ

ないという弱点があった。荷車の使用をできるだけ少なくすることによって御者と馬の数も減らすことができた。行軍の規模が大きくなると荷馬車を破壊し、余分な物資は捨て、従者も選別して軽量化を徹底した。

このやり方は、フィリッポス2世が、マケドニア北方の山岳地帯でトラキア人、パエオニア人、イリュリア人などと戦ってきた経験から生み出された。山岳地帯では荷車の使用は困難であり、従者が多いと行軍の速度は落ちる。とりわけ峠越えの際に大きな負担になる。経済的な理由もある。歩兵の多くを構成する貧しい農民出身の兵は、農耕の担い手である馬やラバを遠征に連れていく余裕がなかった。3.7で見ると馬は高価で貴重だった。

マケドニア軍は紀元前334年春、30日分の糧食を持って東方へ進発した。当時、軍隊は敵国の領土内の糧食は略奪して食べてもよいが、友好国と同盟国内の糧食は勝手に食べてはならないという慣習があった。首都のペラを進発してからヘレスポントスまでは自国領である。なぜ30日分も携行したのであろうか。収穫期であれば、これほど大量の食糧を携行する必要はないはずである。

このことから逆算してマケドニア出発は3月か4月と推定されている。なぜなら、5月は収穫前の食糧事情のもっとも厳しい時期である。農民自身が飢餓状態に陥るほど困窮しており、行軍の途中で調達するのは困難であった。ただし、この地域は水が豊富で行軍は比較的容易であった。

3. マケドニア軍の行軍と兵站

この節では、大王伝の「正史」とされてきたアッリアノスの記述に基づいて、マケドニア軍の実際の行軍と兵站の状況を描写する。テキストとして用いるのは、大牟田章訳・註『フラウイオス・アッリアノス アレクサンドロス東征記およびインド誌』（1996年東海大学出版会）の本文編および註釈編である。以下、テキストの該当箇所は（Arr. I. 1.3）のように表記する。

アレクサンドロス大王が東征を開始したのは前334年春のことである。実際に東征計画を策定したのは大王の父フィリッポス2世であるが、本格的に着手したところで暗殺された（前336年）。⁽¹⁴⁾

アレクサンドロスはフィリッポス2世から対ペルシア遠征の統帥権を引き継いだ。東征開始の時点で、大王はどの程度の地理的作戦範囲を想定していたのだろうか。小アジアが

当面の目標だったのか。あるいは、バビロンやスサなどペルシア帝国の心臓部を制圧することだったのか。またはアケメネス朝の王統を絶やすところまでだったのか。遠くインドまでの遠征は当初の計画に含まれていたのかどうか。作戦期間は何年と考えていたのだろうか。結果的に、東征の空間的な広がりや古代世界において空前のスケールとなったが、その最終ゴールがいったい何だったのかは、今なお議論の渦中にある。⁽¹⁵⁾

3.1 コンパクトな行軍

アレクサンドロスが常に心掛けていたことは、自軍の規模をできるだけコンパクトにして行軍の速度と機動性を保つことであった。かさばる戦利品や敵から捕獲した多数の家畜が戦闘の妨げになることを熟知していたからである。紀元前335年、アレクサンドロスは、本格的な東征に出る前にマケドニア周辺の北方蛮族を平定して足元を固めようとした。

トラキア人との戦いに勝利したアレクサンドロスは、捕虜や家畜など戦利品を奪っても携行しないで、即座に後方へ移送している (Arr. I. 1.3)。また、ゲダイ人の町を占領した際の戦利品も即座に後送している (Arr. I. 4.5)。これは、前339年にフィリッポス2世が、スキュタイ人に勝利した後、捕虜と家畜を多数帯同していたことが足手まといになってトリバッコイ人に大敗した経験を教訓としている。この戦闘にはアレクサンドロスも加わっていた。⁽¹⁶⁾

この教訓から、東征においても捕虜は行軍に帯同させなかった。多くの場合、捕虜は奴隷として売却された。帯同すれば、捕虜にも食糧を与えなければならず、ただでさえ乏しい糧秣が不足をきたすことになる。また、隊列が延びて行軍の速度が落ち、機動性を失い、敵の攻撃目標となってしまう。グラニコス河畔の戦いでペルシア側傭兵として戦ったアテナイ人捕虜二千は、マケドニア本国へ送られて拘束された (Arr. I. 29.5)。

戦場 (battle field) に糧食は持ち込まず、駄獣と従者はかなり後方に待機させて戦闘に巻き込まれないようにした。ガウガメラの決戦 (アルベラの戦い) の前には、全軍に4日間休息を与えて、睡眠と十分な食事の時間を確保したあと、役畜と非戦闘員は後方に残し、兵士は武器だけを携え、糧食は持たないで戦場へおもむいた (Arr. III. 8.9)。⁽¹⁷⁾同様に、メディアにおいてダレイオスを追い詰めたアレクサンドロスは、決戦に臨む前に「役畜の群れをその番人ごと、またその他の糧秣資材も、軍の後尾につくよう指示する一方、彼自身はそれ以外の軍勢をひきい、合戦準備をととのえて前進した」 (Arr. III. 19.3)。

このように食糧輸送部隊を後方に隔離したのは①勝利した場合は、そのあとで糧食をとる②敗北した場合は糧食を敵に奪われないようにする、という理由であろう。4節でみる

ように兵士の食事時間は不規則であり、しばしば食べられないこともあった。

3.2 行軍の速度

あらゆる軍隊の基本は歩兵であるといわれる。古代においては戦闘の勝敗は歩兵の戦闘能力で決した。⁽¹⁸⁾マケドニア軍においても数の上で圧倒的多数を占めたのは歩兵である。したがって、行軍全体の速度は歩兵の歩く速度に規定される。

マケドニア軍の行軍速度は、当時の常識を超えていた。前335年、マケドニア軍が北方の山岳地帯で蛮族平定をしている間に、テバイでは、アレクサンドロスが戦死したという噂が広まった。占領地では反マケドニア感情が昂じてこれに乗じた蜂起が起きた。この動きにアテナイが加担すると危険であることを察知したアレクサンドロスは、山間の悪路を含む直線距離380キロメートルを隠密裏にわずか12日で走破した。⁽¹⁹⁾テバイ側はマケドニア軍が目前に現れてもまだ信じられないありさまであった。⁽²⁰⁾

「アテナイ人たちはアレクサンドロス接近の知らせを聞いただけで早くも意気沮喪し、結局さきごろピリッポスに贈られた栄誉とくらべてさえ過大なほどの栄誉を、彼に認めることになった」(Arr. I. 1.3)。アテナイが腰砕けになったのは、アレクサンドロスが死んだという誤報を信じていたところに思いがけないスピードでアレクサンドロスが到来したからである。このように類まれな速度は、戦闘だけでなく政治的にも有効に働いたのである。

敵の戦闘準備が整わないほどのスピードで進撃し、相手の戦意を失わせることもしばしばであった。⁽²¹⁾決定的な場面としては、ユーフラテス川を守備していたマザイオスの例が挙げられる(前331年)。マザイオスは、マケドニア軍が橋を架けて渡河するのを警戒していたのだが、アレクサンドロス到来の報を聞くと急遽退却してしまった(Arr. III. 7.2)。

スサを進発したアレクサンドロスは、山地ウクシオイ人を急襲する。しかし、「ウクシオイ人の側はアレクサンドロスの行動が迅速なのに驚きおそれ、これまで何より恃みにしていた地の利という点でも、逆に不利な立場に追い込まれて、白兵の接戦に入るまでもなく遁走してしまった」(Arr. III. 17.5)。

バクトラへ進撃中だったアレクサンドロスは、急遽、太守サティバルザネスを討つために約110キロメートルの距離を二日で駆け抜けた。サティバルザネスは「その神速ぶりに度肝を抜かれて、わずかばかりのアレイオイ人騎兵とともにいち早く遁走した」(Arr. III. 25.7)。

(10)

しかし、アレクサンドロスの前進が速すぎて味方に損害が出ることもあった。ダレイオスに対する最後の追撃戦の過程で「軍勢のうち多くの者は、彼の全速強行軍のために疲労困憊して途中置き去りにされ、乗馬もまた力尽きて斃死するものが相次いだ」(Arr. III. 20. 1)。(22)

ダレイオスの身柄を拘束したベッソスを追撃する場面では、ついに奇策を用いざるを得なくなかった。アレクサンドロスが全速力で追撃すると歩兵がついてこれなくなるので、騎兵を馬から下ろし、そのかわりに歩兵に対してその武装のまま乗馬することを命じた(Arr. III. 21. 7)。これは、戦闘の最後の決め手となるのがやはり歩兵であることを示唆している。このとき、午後遅く進発した追撃隊は夜のあいだに約73.6キロメートルを踏破してついにベッソスに追いついた(Arr. III. 21. 9)。

行軍の速度を上げるために、本隊に重装歩兵と輸送部隊を預け、アレクサンドロスは自ら身軽で機動性のある突撃部隊を引き連れて追撃戦を行うこともあった。(23)

緊急時ではない通常の行軍速度はどの程度であったのだろうか。それを測る手掛かりとして、マケドニア軍が本国を出てから、「二十日かかってセストスに到着した」(Arr. I. 11. 5)という記述がある。エンゲルスの試算のように、この間二日の休養日を仮定すると、一日の平均行軍速度は28.8キロメートルになる。

ただし、この行程は自国内であり、敵と遭遇する可能性がほとんどないため、行軍は比較的楽であり、ペースが上がったのであろう。ガウガメラの会戦の後、バビュロンからササまでの約365キロメートルはやはり20日間で移動している。ここもエンゲルスの仮定に従えば、実際に行軍したのは14日間で、1日平均約26キロメートルとなる。このように考えると、マケドニア軍の平均行軍距離は一日当たり25~26キロメートル程度と考えられる。

しかし、イラン山岳地帯から中央アジアさらにインドに入ると行軍の速度は目に見えて落ちている。それは、厳しい地形や極端な寒さと暑さと湿度もあったうえに、全軍に厭戦気分が高まり、行軍の規模がどんどん大きくなっていったからである。

3.3 リスクの軽減

アレクサンドロスと言えば、戦場において勇猛果敢に単騎先頭に立って、駆け抜けるイメージがある。アリアッソスにおいても英雄的なシーンがふんだんに描かれている。ポンペイで発見されたダレイオスとの一騎討ち(イツソスの戦い)の有名な壁画は、単騎突入のイメージを増幅している。実際には、一騎討ちはなかったのだが、のちのアレクサンド

ロス・ロマンに見られるように大王を超人的なヒーローと見る系譜は長く引き継がれてきた。

しかし、現実のアレクサンドロスは慎重だった。戦闘開始前には時間の許す限り入念な準備と調査を行い、リスクを最小化しようという意志が見られる。たとえば、ガウガメラの決戦前には、戦場の地形や障害物、敵軍の配置の検分を慎重に行っている。このとき、パルメニオンが夜襲をかけようと進言したのに対して、アレクサンドロスは「勝利をこっそり盗みとるとするのは不名誉なやり方だ」として拒否したという有名な逸話が残っている。⁽²⁴⁾しかし、この発言は英雄の美意識の表明というよりもアッリアノスが解釈するように、夜襲は不確実性が高く、予想外のことが起きやすいのであえてリスクを冒さなかった (Arr. III. 10. 2) と考えるのが妥当であろう。⁽²⁵⁾

ブリアンの「王が遠征のあいだに冒した危険は、計算された危険なのである。彼は背後を固めないうちはけっして新たな段階に挑む決心をしなかったし、これから征服しようという国々に関する情報をとらないうちは行動を起さなかった」という見方が正鵠を得ている。

アレクサンドロスは、敵地に侵入した場合、入念に情報収集をするのが常である。多くの場合、かなりの兵力を割いて土地の事情を調べさせ、現地人を捕まえて尋問した。⁽²⁶⁾戦略的なリスク軽減の視点から軍隊をコンパクト化したケースもある。ミレトスにおいてギリシア艦隊を解散したことがある。この段階ではペルシアの海軍勢力の方が優勢であり、自ら海軍を解散するのは思い切った決断である。この点は、ギリシア艦隊は同盟諸市の寄せ集めで訓練不足が明らかであり、これと正面から戦うのは「無分別もいいところだ」 (Arr. I. 18. 7) と彼我の力量の差を率直に認めてリスクを回避したと説明されている。ただし、この点について、資金的に海軍を維持できなくなったからだとする説もある。⁽²⁷⁾

3.4 糧食の確保

馬の食糧補給がいかに大切であったかは次のエピソードが物語っている。ある行軍の途中、フィリッポス2世はすばらしい景色の場所で野営しようとした。しかし、あいにく、そこには駄馬の食糧がなかったので場所を移さざるを得なかった。そのときフィリッポスは「人生はなんとままならぬものであるか。駄馬のためにわれわれの行動が拘束されねばならぬとは」と嘆息したという。⁽²⁸⁾

マケドニア軍はどのように糧食を確保していたのだろうか。前335年、ゲダイ人を倒し

(12)

たのちマケドニア軍は、ペッリオン市を包囲した。ここでアレクサンドロスは、部下に十分な数の役畜を引き連れさせ、護衛隊として十分な数の騎兵をつけて食糧徴発に出発させている (Arr. I. 5.9)。これは、すでに戦闘態勢が完了している状況下での食糧確保の方法を示している。

しかし、通常、糧食の確保は危険を伴った。マラカンダ (サマルカンド) 付近では、糧食調達のために遠くまで出かけていたマケドニア人が、現地民によって切り殺されるといふ事件が起き (前 328 年)、マケドニア軍は全面的な反撃に出て報復した (Arr. III. 30.10)。

パルティアでは、行く手には砂漠が広がっているという情報を得て「ここで糧食を確保しておくために、騎兵隊と若干の歩兵とを付けてコイノスを徴発に出発させた」(Arr. III. 21.4)。ところが、ここに急報が入り、アレクサンドロスは敏捷なものだけを選んで武器と二日分の食料だけを携えて全速力で前進を開始した (Arr. III. 21.2)。

糧食の補給のためには入念な計画と準備がなされていた。それを担当する者の責任は重かった。シリアの太守アリンマスが、内陸への侵攻にあたっての糧秣の準備が不十分だとして更迭された例が象徴的である (Arr. III. 6.8)。⁽²⁹⁾アリンマスの怠慢によってマケドニア軍は糧秣不足に直面し、作戦の岐路に立つことになった。ペルシア帝国の心臓部を突くとすれば、ここからユーフラテス川沿いに南下して一挙にバビュロンを攻略するのが自然である。しかし、すでに6月の収穫期を過ぎていた。都市や神殿に収納された穀物を強制徴発するには抵抗が予想され、しかも酷暑のメソポタミア南部に行くことはきわめてリスクが高かった (大牟田 1559 ページ)。このためマケドニア軍は北回りの迂回路を選択することになった。

一方、海上の軍船で作戦行動をしているときはどのように糧食を確保していたのだろうか。この場合は、乗組員自ら下船上陸して危険を冒しながら糧食を調達していた (Arr. I. 12.9)。

塩の補給についてはアッリアノスの直接の言及はないが、アモンの神官がエジプト王への贈り物として「天然の塩」を持参する (Arr. III. 4.3) ことから、行軍中の兵士たちは岩塩を利用していたのではないかと思われる。

侵略軍を待ち受ける側が、焦土作戦を計画するのは常套手段である。小アジアを守備していたペルシア側の傭兵隊長メムノンは、焦土作戦によって戦術的に退却し、マケドニア軍を糧秣難に陥れようと提案したが、ペルシアの太守に却下された (Arr. I. 12.9)。

カウカソス山麓でアレクサンドロスに追い詰められたベッソスはこのあたりを荒らしまわり、相手を糧秣難に陥れて前進を食い止めようとした。しかし、アレクサンドロスは、豪雪に難渋しながら追跡を続けた (Arr. III. 28.8)。

ベッソスの焦土作戦はアレクサンドロスを苦しめた。この点はクルティウス・ルフス『アレクサンドロス大王伝』の記述が具体的である。「一方アレクサンドロスは、上述のようにすでにカウカソスを越えていたが、穀物不足のために深刻な飢餓状態に瀕していた。この一行のものたちは、胡麻から絞り出した液をオリーブ油かわりに手足に塗りつけていたが、この液は1アンボラ（26リットル）あたり240ドラクマ（ラテン語原文ではデーナーリウス）、蜂蜜は390ドラクマ、葡萄酒は300ドラクマなどという値段になっていた。小麦はまったく、あるいはごくわずかししか見当たらなかった」（ルフス p. 266, ルフスについては5節参照）。

また、「こうした物資の窮乏のため、兵士らは川魚と野草で飢えをしのいでいた。そして、今やこれらの食物さえ底をつくと、荷物を運んでいた駄獣を屠殺するようにとの命令がでた。バクトリアにつくまでその肉で命を長らえたのである（ルフス p. 267）。飢餓に苦しんだときに駄獣の肉を食べてしまう事態は、のちにイラン南部のガドロシア砂漠でも起きる。しかし、駄獣を食べてしまうとテントや負傷者を運ぶ手段がなくなり、人的被害はさらに拡大する。

前328年の冬は大雪に苦しめられ、食糧も完全に不足していた。このときは投降してきたコリエネス軍が砦に備蓄していた穀物、葡萄酒、塩漬け肉の提供を受けて窮地を脱した（Arr. IV. 21. 10）。

インドでは、すでに服属した地域から穀物やその他必要な物資を徴発し、アレクサンドロスのもとに届ける後方残留部隊があったことが記されている（Arr. V. 21. 1）。⁽³⁰⁾

安全な水を確保することも重要であった。スキュタイ人の追撃戦においては暑熱による咽喉の渇きに苦しめられ、「アレクサンドロス自身も馬を進めながら、その土地で手に入りさえすればどんな種類の水でもおかまいなしに飲んだ」（Arr. IV. 4. 8）。その結果、アレクサンドロスは激しい下痢に見舞われて重体となった。

3.5 誤算と危機

東征が長期化し、ソグディアナで激しい抵抗にあうと、アレクサンドロス軍は苦戦するようになる。とくに守備隊が襲撃されるケースが増える。マラカンダ（サマルカンド）の守備隊がスピタメノスとスキュタイ人の連合に全滅させられた事件もそのひとつである。守備隊の騎兵は長い行程の強行軍を続けて疲労しており、青草の稜の不足もあって馬も疲労困憊していたところに敗因があった（Arr. IV. 5. 5）。

さらに、守備隊の中には老兵や、もともとペルシア側についていたギリシア人傭兵が多

く含まれていたため、戦力の面からも士気の間からも弱点があった。彼らはスキュタイ人の得意とする馬による遊撃戦に翻弄されたのである。アレクサンドロスは、報復のためにマラカンダへ急行した。約276キロを4日で踏破した (Arr. IV. 6.4)。また、バクトリア地方の守備隊はマッサゲタイ人に全滅させられた (Arr. IV. 16.5)。⁽³¹⁾ここでも守備隊の装備と兵力が必ずしも十分ではなかったことをうかがわせる。

アレクサンドリアの名で知られる都市建設の実態はギリシア人傭兵の一部、近在の原住民、マケドニアの老兵の寄せ集めであった (Arr. IV. 8.7)。

アレクサンドロス軍の最大の危機は、インドからの帰途、ガドロシア砂漠横断であった。ここまでは周到な準備と情報収集を心掛けてきたアレクサンドロスだが、このときはイラン南部の広大な砂漠地帯に足を踏み入れて大苦戦する。このコースを選択したのは、ペルシア湾を航海するネアルコスの艦隊のために、水と食料をあらかじめ沿岸に確保、貯蔵しておくためであった。しかし、「灼けつくような暑さと飲料水の補給難が軍勢の大部分、またとくに役畜のほぼ全部をも破滅に追いやった」 (Arr. VI. 24.4)。

この失敗の原因は、コース選択の誤りと同時に、この時期には行軍自体が巨大化していたことである。東征の前半においては、コンパクトな行軍が有効に機能していた。しかし、遠征が長期化するにつれて兵士の現地女性との結婚が公認あるいは奨励されるようになり、同行する子供の数も急増した。この点、Bosworthは、この時点での女・子供の数を少なくとも3万人と推定しており、不毛の地を行軍するにはあまりにも多すぎたという。⁽³²⁾砂漠で突如として降った雨による鉄砲水によって「軍に同行していた女子供大多数の命がうばわれ、王専用の行李全部に加えて、せっかく生き残った役畜までもが押し流されてしまった」 (Arr. VI. 25.5) という大惨事も起きた。

3.6 技術革新

これまで、コンパクトで機動性のあることがマケドニア軍の強みであることをみてきた。しかし、コンパクトであることは、物理的に兵力が不足することを意味しないのだろうか。もちろん、マケドニア軍がコンパクトネスを追求したのは、ロジスティクスに関わる部分であって、兵力を最小限にすることを意図したわけではない。しかし、マケドニア軍の兵員がペルシア軍に対して、相当少ないのは事実である。紀元前334年春、マケドニア軍がヘレスポントスへ向けて進発した時の兵力は「軽騎兵を含めて三万を多く出ない数の歩兵と五千騎余の騎兵」 (Arr. I. 11.3) である。

グラニコス川で対峙した時の、ペルシア側の兵力はおおよそ騎兵2万、ギリシア人傭兵に

よる歩兵2万弱であった (Arr. I. 14.4)。このときの兵力はほぼ互角である。しかし、ダレイオスと直接に対峙したグラニコスの戦いでは、ペルシア側は60万人とされている (Arr. II. 8.8)。また、ガウガメラの会戦において、マケドニア軍は騎兵七千、歩兵四千であったという (Arr. III. 12.5)。これに対して、ダレイオス軍は、騎兵四万、歩兵百万、大鎌戦車二百輛と伝えられる (Arr. III. 8.7)。この数字にはかなりの誇張があるとしても、ペルシア軍は少なくとも数倍の兵力があったと思われる。

一般的にはハンディと考えられる兵力の格差をどのように埋めたのだろうか。ひとつは兵士の軍事スキルとモラルの向上である。マケドニア軍はフィリッポスの訓練によって大幅に強化されていた。ペッリオン市を包囲している際に、アレクサンドロスは、敵の目の前で、よく訓練された自軍の密集歩兵部隊のデモンストレーション (演練) を見せつけた。⁽³³⁾肝をつぶした敵は戦わずに逃亡した (Arr. I. 6.1)。一方、ペルシア軍は帝国内の多種多様な民族からなる多国籍軍であり、王に対する忠誠心に欠けるところがあった。

工学的技術の導入も目覚ましい。アレクサンドロスは、パセリスを出発すると軍の一部をペルゲへと向かわせたが、その道はトラキア人部隊があらかじめ造成しておいたものであった (Arr. I. 26.1)。このように、難路の行軍においては、工兵隊が先発して道路を整備、確保していたことがうかがわれる。インダス川へ向かう道も先発していた兵士によって造成された (Arr. IV. 30.7)。また、城砦都市を攻撃する時にはしばしば攻城機が登場する。工学的技術は、ペルシア軍とは比較にならないほど高いレベルに達していたと思われる。ペルシア軍の主力兵器は大鎌戦車であったが、その御者と馬を攻撃されて実戦では有効ではなかった。また、インドの諸民族が用いた象戦車も、アレクサンドロス軍に対しては空回りした。

インドからの帰途、インダス川には、別働隊としてヘパイステイオンが派遣され、本隊に先回りして船橋をかけておいた (Arr. V. 3.5)。⁽³⁴⁾このとき使われた船は分解されて、陸路を搬送され。ヒュダペス川を渡るときに組み立てられた (Arr. V. 8.4)。

3.7 兵士の補充と除隊

前334年、アレクサンドロスは、カリアにおいて、新婚の兵士に一時帰国を許可し、帰隊する際に兵士を徴募してくるよう命じた (Arr. I. 24.2)。翌年徴募されてきたのは、マケドニア人歩兵三千、騎兵三百、テッサリア人騎兵二百などであった (Arr. I. 29.4)。のちにシドンでギリシア人傭兵四千が加わった (Arr. II. 20.5)。また、メンピス滞在中には、ギリシア人傭兵四百とトラキア人騎兵五百が増援された。このように東征の初期に

は、兵士の補充は本国から行った。その理由は信頼感である。「王はエジプト遠征を急ぎ、アミュンタスに三段櫂船 10 隻を与え、新兵徴発のためにマケドニアに派遣した。戦いが勝利しても軍勢は消耗するものであり、征服した部族の兵士よりは祖国の兵士のほうが信頼できるからであった」（ルフス 88）。

アレクサンドロスは多くの占領地に守備隊を置いて、次の目的地へ向かった。守備隊の人員・規模などに関するアッリアノスの記述はさほど明確ではない。本国から補充された兵員数は比較的是っきりしているが、戦死者、負傷者、退役者、駐屯兵、現地の行政官として残してきた者などを差し引いた全軍の兵力がどの程度であったのかは、明確ではない。とくに戦死者の数はペルシア側と比較して不自然なほど過少に記録されている。⁽³⁵⁾

大規模な増援部隊が到来したのは、紀元前 331 年 12 月のことである。スサに入城していたアレクサンドロスのもとに、アミュンタスが本国で徴募してきた部隊が追いついたのである（Arr. III. 16. 10）。その陣容はマケドニア歩兵六千、同騎兵五百、トラキア人歩兵三千五百、同騎兵六百、ペロポネソスからの歩兵四千など合計一万五千とかつてない大幅な増強となった。それでも軍をコンパクトに維持するというアレクサンドロスの方針は、ペルセポリスに入城した前 329 年までは維持されている。ペルセポリスにおいても全軍の兵力は、本国を出発したときからそれほど大きく増えてはいないと見るのが自然であろう。

エクバタナの地において、テッサリア人騎兵隊および他の同盟軍部隊は除隊となったが、かなりの数の兵士が引き続き傭兵として従軍した（Arr. III. 19. 5）。また、投降してきたギリシア人傭兵をペルシア側から得ていた給料と同じ条件で自軍に加えたこともある（Arr. III. 24. 5）。

オクソス河畔では、マケドニア人の老兵とテッサリア人のうち本人の希望でここまでつき従った者たちを帰国させた（Arr. III. 29. 5）。このあたりから、軍に占めるマケドニア兵とギリシア兵の割合が次第に低下し、東征軍も次第に多国籍化していく。これに反発する古参のマケドニア兵とアレクサンドロス大王の心理的緊張は危険水域にまで高まっていくことになる。

馬の補充はどのようにしていたのか。アッリアノスの言及は少ない。ベッソスを捕獲したのち、現地の馬で騎兵隊を補充した。多くの馬がカウカサス山越えの途中で失われてしまったからである（Arr. III. 29. 5）。当時はまだ蹄鉄が知られておらず、長途の行軍で馬蹄が擦り減ってしまったことも馬匹の消耗を激しくした（大牟田 1691 ページ）。

馬は人間よりもはるかに高価だった。東征の終盤、ペルシア湾を航行したネアルコスの報告によれば、馬は 1 頭 1 タラントンである（ルフス 429）。ちなみにアレクサンドロスの愛馬ブーケファラスは 13 タラントンとされている。⁽³⁶⁾（貨幣価値については 5 節で論じる）

4. 兵士の食生活

前節では、アッリアノスの記述を中心にして東征軍の行軍と兵站を復元した。糧食と水の確保がいかに重要かを再確認した。ところが、兵士たちが実際に何を食べ、何を飲んでいたのかというミクロのレベルになると、アッリアノスは沈黙している。クルティウス・ルフスもわずかしか語っていない。そこで、アレクサンドロス東征からおよそ70年前の出来事である『アナバシス』を題材にすることによって、古代ギリシア軍の状況を推測することにする。

クセノポンの『アナバシス』は、紀元前401年、ペルシア国内に放置されたギリシア人傭兵が故国に帰りつくまでの6000キロにわたる逃避行の記録である。これに関しては2007年、J. W. I. Leeによる*A Greek Army on the March: Soldiers and Survival in Xenophone's Anabasis* (Cambridge University Press) が刊行され、兵站の観点からもアナバシスの分析がなされている。⁽³⁷⁾以下、Leeの第8章に依りながら、マケドニア軍の兵士の食生活を類推することにする。

古代ギリシアでは、男性が家庭で料理をつくることはごく当たり前であった。戦場では、数人単位の小グループごとに自炊をして食卓を共にした。『イリアス』に登場する英雄たちも例外ではない。

クセノポンの参加した小キュロスの軍隊には、兵士たちに一齐に食事を提供する給食のようなシステムはなかった。一方、ペルシア軍(大キュロス)は、お抱えのコックと給仕が兵士たちの食事の面倒をみていた。

アナバシスにおいては、兵士は基本的に朝食 *ariston* と夕食 *deipnon* の一日二食であるが、食事時間は一定しないのが当たり前であった。行軍中、あるいは攻撃中には、食糧を携行していた場合でも、立ち止まってそれを摂取することは困難であった。そこで、兵士たちは炒った穀物(豆類)やパンくずを口に入れてその場をしのいだ。

朝食は必ずしも一日の始まりではなかった。朝食前に行軍が始まることも珍しくなかった。作戦会議をしたり、余分な身の回りのものを捨てたり、部隊をコンパクトにするために捕虜や駄獣の数を減らすなどの作業が行われた。実際、朝食のために火を起こしたり、調理をするのは手間と時間がかかる仕事である。食事時間はせいぜい30分しかとれないので、このようなときは保存食か食べ残しに頼ることになった。行軍が朝食後に始まるときに限って、兵士たちは火を起こして新鮮な食べ物にありつくことができた。夕食は通常、日没前に摂った。しかし、日のあるうちに戦闘が続いた場合は夕食が摂れないことも珍し

くなかった。

古代には、火を起こすことはそれほど簡単でなかった。そのとき借用されたのが神殿など宗教施設の炬や松明である。あるいは、軍の神聖さの象徴としての松明（聖火）を携行する場合もあったが、それができない場合は新たに火を起こす必要があった。火を起こす方法は、火打ち石であった。

火を起こして燃やし続けるためには、大量の燃料が必要であった。多く場合は木材で、木炭も用いられた。木材は火を起こすだけでなく、暖をとるためにも使われた。Lee の試算によれば、小キュロス軍の一日当たりの木材の消費量は2万2千ポンド=およそ10トンにも及ぶ。

5. 資金調達と富の分配

この節では、アッリアノスと並ぶ主要なアレクサンドロス伝であるクルティウス・ルフスの『アレクサンドロス大王伝』を中心に、アレクサンドロス軍を成り立たせてきた経済的側面を中心に考察する。従来、ルフスの大王伝は誇張が多いとされ、アッリアノスに比べて一段低い資料的価値しか持たないと見られてきた。しかし、近年、原典研究の進展により、アッリアノスだけを正統とする考え方は修正されつつある。⁽³⁸⁾ 戦闘場面の描写が多いアッリアノスに対して、ルフスは兵士の賃金や商品の価格に関する情報が多く含まれている。以下、テキストとして『アレクサンドロス大王伝』（西洋古典叢書 谷栄一郎・上村健二訳 京都大学出版会 2003年）を用い、該当箇所はページ数で示す。（ルフス8）はテキストの8ページであることを示す。

貨幣単位の換算については Cartledge に従う。⁽³⁹⁾ 1 タラントンは6000 ドラクマである。熟練労働者の日当は2~3 ドラクマであった。あるいは、1 タラントンはアテナイの熟練労働者10年分の稼ぎに相当したといわれる。⁽⁴⁰⁾ 金持ちと言われるためには3 タラントン以上の収入が必要と思われる。⁽⁴¹⁾ この基準から考えると、前330年にアレクサンドロスがペルシアから没収したとされる18万タラントンは巨額である。

5.1 兵士のコスト

3.7でみたように、アレクサンドロスはしばしば本国マケドニアから兵士を徴募してい

る。「アレクサンドロスは、ペロポネソス半島からギリシア人傭兵を募るためにクレアンドロスに軍資金を持たせて出発」(ルフス 8) させた。兵士のコストはどれくらいであったのだら。クレアンドロスは、前 332 年晩春、テュロスを包囲中のアレクサンドロスのもとへ 4000 名のギリシア人傭兵を連れて帰還した。

歩兵の日給は 1 ドラクマであったとされる。⁽⁴²⁾ 熟練労働者の日当が 2~3 ドラクマであることから妥当な推論と思われる。1 タラントンは 6000 ドラクマである。4000 人の兵士を雇用すれば、一日当たり 4000 ドラクマが必要となる。30 日雇えば 12 万ドラクマが必要となる。これは 20 タラントんに相当する。4000 人の兵士を 1 年間雇うとおおむね 240 タラントン必要となる。

アレクサンドロスは、エーゲ海のレスポス島などを敵の守備隊から奪還するための資金と本国マケドニア守備のための資金を送ったことがある。この時、「二人には軍資金として 500 タラントンを分け与え、アンティパトロスとギリシアの町を守っている者たちには 600 タラントンを送った」(ルフス 11)。

5.2 ダレイオスの資産を接收

アレクサンドロスがマケドニアを進発する時には国家財政は破綻しており、わずか 70 タラントンの資金と 30 日分の食料しかなかったと伝えられる。⁽⁴³⁾ アレクサンドロス自身は、東征が長期化したので帰国を望む兵士たちに対して「諸君を、500 タラントンの負債とともに、わたしは迎え入れた—王家の全財産が 60 タラントんに満たなかった頃にだ」(ルフス 439) とかつての貧困時代を思い出させている。

資金難はフィリッポス 2 世が長年、外征や外交に多額の支出をしてきたからである。銀山の開発で多額の収入を得ていたが、それでも支出を賄うことはできなかった。フィリッポスはマケドニアを強国に育て上げたが、その代償として財政は困窮した。

ルフスの記述によると、東征が進むにつれて没収する金額が次第に増加してゆく様子がよくわかる。まず、エジプトのメンピスでは、ダレイオスの將軍で町を守備していたマザケスが「800 タラントン以上の黄金のすべてと王の家具調度一切をアレクサンドロスに引き渡した」(ルフス 89)。

ペルシアに侵入してから急速に資金繰りが好転したのは、戦勝のたびにペルシア側の財宝や金庫を接收したからである。例えば、ダマスカスで得た戦利品は「鑄造貨幣の総額は 2600 タラントン、加工された銀の重量は 500 タラントン」(ルフス 54) であった。

ガウガメラの戦いののち、アルベラの町がアレクサンドロスに引き渡された。そこには

「4000 タラントンあり、さらに高価な衣服があった」（ルフス 137）。

このように考えると、フィリッポスとアレクサンドロスの東征の動機として、困窮した国家財政を立て直すためにペルシアの富を強奪することが隠れた目的であった可能性はある。

一方、ペルシア側の金銭感覚はどのようなものだったであろうか。「ダレイオスは、アレクサンドロスを殺した者には 1000 タラントンを与えると触れさせていた」（ルフス 26）という。1000 タラントンは二万人の兵士をほぼ 10 か月間雇うことができる金額である。のちダレイオスからもたらされた和睦を求める手紙に対して、アレクサンドロスは「私を狙う刺客に 1000 タラントンを払おうとしたではないか」（ルフス 60）と詰問している。

ダレイオスの三度目の和睦の申し入れの趣旨は、母と二人の王女の返還であった。その条件は「三人の身代金として三万タラントンの黄金をどうかお納めください」（ルフス 106）という巨額のものであった。ここで將軍パルメニオンは「今や行軍の足手まといとなっているたった一人の老婆と二人の娘を、三万タラントンの黄金と取り替えることに大いに賛成します」（ルフス 107）と言うのだが、アレクサンドロスはこれを一蹴する。アレクサンドロスとパルメニオンの意見の衝突は随所に現れる。この場面も、のちのフィロタス・パルメニオン粛清（前 330 年）に至る伏線となっているかのようなルフスの書き振りである。

一方、敗戦を重ねて次々に資産を奪われていくダレイオスの負け惜しみは次のように語られる。「高価な家具調度や愛妾、宦官などは重荷以外の何物でもないことをわしは経験から悟った。アレクサンドロスもこうした戦利品を手にとっておれば、今までの戦闘の有利さを失ってしまうのだ」（ルフス 136）。このようにダレイオスが悟ったときにはすでに大勢は決していた。

5.3 富の分配

ペルシア側の莫大な資産を接収することで東征軍は資金難を解消し、苦難の道を行軍してきた兵士たちにも金銭的に報いることができるようになった。いよいよバビュロンに入城したアレクサンドロスはここでも巨額の資産を摂取した。接収した総額は明らかではないが、ここでようやく兵士への報酬に関する記述が現れる。

バビュロンで引き渡された財貨からマケドニア騎兵には 600 ドラクマが支払われ、外国の騎兵は 500 ドラクマを受け取った。マケドニアの歩兵は 200 ドラクマ、他の兵士は三ヵ月分の給与を得た（ルフス 143）。マケドニア騎兵と歩兵の賃金格差が 3 対 1 であること

が分かる。

アレクサンドロスはさらにスサへと進軍した。「町に入ると、王の宝物庫から信じがたい額の財貨を持ち出した。五万タラントンの銀、硬貨に鑄造したものではなく、延べ棒のままのものである（ルフス 145）。

守備隊に対しても相応の分配をしている。アレクサンドロスの東征においては、結果的に多くのマケドニア人、ギリシア人が現地に残留させられることになった。たとえばカウカソスのアレクサンドリアにおいてはマケドニアの老兵 7000 人と、それに加えて軍務を解かれた兵士たちを新しい都市に定住させた（ルフス 262）。

除隊した兵士や老兵や負傷兵でギリシアまで帰還する体力のない者は縁もゆかりもないペルシアの辺境で生涯を終える運命が待ち受けていた。こうした不運な兵士たちに対しては、ひとりひとりに 3000 ドラクマと服 10 着、耕作のための牛馬と穀物が与えられた（ルフス 160）。

アレクサンドロスはヘカトンピュロスでギリシア人兵士の帰国を許した。このことが全軍に動揺を生んだ。ギリシア人の騎兵一人につき 6000 ドラクマ、歩兵には 1000 ドラクマが与えられたので、戦争は終わったのだと思い込んだのである（ルフス 196）。6000 ドラクマは 1 タラントンであるから、ギリシア騎兵にはアテナイの熟練労働者 10 年分の報酬が与えられたことになる。

行軍がさらに進むと帰還兵に対する手当はさらに厚くなる。ソグディアナにおいて、「王は、除隊の時期が来たもののおよそ 900 名を選び、そのうち騎兵には各々 2 タラントン、歩兵には 3000 ドラクマを与え、子供をつくるようにと指示したうえで帰国させた」（ルフス 274）。除隊の際の手当は最終的には「古参兵ら 1 万人以上が、過去の兵役に対する報酬に加え、旅費として 1 万タラントンを与えられたうえで除隊」（ルフス 444）と天文学的な金額となった。

アレクサンドロスは、ペルシアから接収した資産で全兵士の負債を帳消しにしてやったこともある。1 万タラントンを用意したが残ったのはわずか 130 タラントンであった（ルフス 437）。

インドに入るとアレクサンドロスの気前の良さは加速していく。カシミール地方の王に対して「運んできていた戦利品のうちから 1000 タラントンと、金銀でできた宴会用の食器、おびたしいペルシアの衣服、持ち馬のうち 30 頭」（ルフス 362）を贈った。このころには、軍資金が相当豊かになっていることをうかがわせるが、こうした大王の奢侈に対して質実剛健な古参のマケドニア人は苦々しく思うのだった。

アッリアノスは金銭的な記述が少ないが、例外的にアレクサンドロスがペルシア湾での船乗りを見つけるために「500 タラントンの金を持たせて、ポイニキアとシリアに派遣し

た。海に生きる人々を獲得させるためだった」(Arr. VII. 19.5)と伝えている。

6. おわりに～未完の帝国

アレクサンドロスの行軍の迅速さ (agility) は、輸送部隊を最小化することによってもたらされた。兵士が自ら武器と糧食を運ぶことで従者と駄獣の数を大幅に減らすことができた。行軍がコンパクトになったことで兵站の制約が小さくなり、空前の距離を進軍することができた。行軍が身軽になり、機動性が高まったことで軍事的に成功した。

しかし、国家形成あるいは統治という政治的観点からみると、この迅速さが致命的な弱点になるというパラドックスが生じた。つまり、実効的な支配と行政を行う間もなく、次から次へと転戦したために、結局はペルシア帝国内に確固たる権力基盤を確立することができなかった。アレクサンドロスが次の目的地に移動してしまうと、即座にその地域の政情は不安定になるか、汚職が蔓延することになった。このような状況では、結局、ペルシア帝国の旧支配層の力が温存されることになった。こうした脆弱で不安定な統治形態は、大王の死後に延々と戦われるディアドコイ戦争の直接の原因になったとも言えるだろう。

要するに、アレクサンドロス軍はペルシア帝国の旧支配層は駆逐したが、基層社会を把握するには至らず、後継国家を創造することはできなかった。この意味で、冒頭に挙げたヘーゲルのように「膨らんだ理想がただちにしぼむような感」という評価が生まれてくるのであろう。

アレクサンドロスの支配は、結局は点と線でしかなく、広大なペルシア帝国を支配し、征服はしても、住民の信頼を得ることはできず、新しい行政機構を作り上げる時間もなかった。この点は、ブリアンが正しく指摘するように「アレクサンドロスの帝国は、永遠に創造の過程にある国家なのである。それは、征服軍の動きにつれて移動する国家である (ブリアン 81)。

アレクサンドロスの行軍はいくつかの地域ではとくに迅速であった。だから、彼には、アケメネス朝の帝国を部分的にも、完全に支配するだけの時間がなかった」(ブリアン 78)。アレクサンドロスの帝国は流星のように光芒を放ちながら、消えていった未完の帝国であった。

あとがき

このテーマを考え始めたのは遠く1991年、イラクのクウェート侵攻に対して米国が「砂漠の嵐」作戦で地上軍を投入した頃である（第一次湾岸戦争）。当時米国に留学していた私は熱狂と陶酔のうちに高揚していく米国の世論を空恐ろしい思いで見ている。しかし、これはまだ悪夢の始まりに過ぎなかった。第二次湾岸戦争で、米国は「悪の帝国」であるイラクを崩壊させた。ところが「自由の帝国」であるはずの米国は軍事的に勝利してもメソポタミアとシリアを安定的に統治することができない。ここにアレクサンドロス帝国が二重写しに見えてくる。力の空隙を縫うようにテロリズムが横行し、イスラム国の台頭を招いている。現代版ディアドコイ戦争が始まったかのようだ。本稿はこうした現代の状況をアレクサンドロス帝国に逆照射して成立した産物である。執筆においては首都大学東京の前沢伸行先生から貴重な助言とご指導を頂いた。記して深く感謝する。

注

- (1) 森谷公俊『アレクサンドロス大王 「世界征服者」の虚像と実像』（講談社 2000年）p. 13
- (2) クセノフォン『ソクラテースの思い出』（岩波文庫 1958年）p. 123
- (3) 森谷 前掲書 pp. 20-21
- (4) Pierre Briant, *De la Grèce à l'Orient Alexandre le Grand* 1987 p. 124
- (5) ハリー・サイドボトム『ギリシャ・ローマの戦争』吉村忠典・澤田典子訳（岩波書店 2006年）p. 100
- (6) アジアでの滞在が長くなると、現地の女性と結婚する例が増え、この原則は崩れていく。
- (7) 湾岸戦争（1991年）で米軍は60日分の物資を備蓄してから戦闘を開始した。江畑謙介『軍事とロジスティクス』（日経BP社 2008年）p. 46
- (8) Donald W. Engels, *Alexander the Great and the Logistics of the Macedonian Army* (University of California Press) 1978 p. 22
- (9) Engels 前掲書 p. 120.
- (10) Engels 前掲書 p. 121.
- (11) サイドボトム前掲書 p. 102
- (12) フィリッポスの功績については、A. B. Bosworth, *Conquest and Empire*, Cambridge University Press, 1988 chapter 1 が詳しい。
- (13) ロビン・レイン・フォックスによれば、ギリシア市民軍の歩兵は、兵士一人につき、召使をひとり連れて行くことが許されていたが、フィリッポスは兵士10人につき1人の随行者しか認めなかったという（『アレクサンドロス大王（上）』138ページ、青土社、2001年）。
- (14) 前336年春、すでにフィリッポスの先遣隊1万人はヘレスポントス海峡を渡っていた。
- (15) Cartledge p. 170.
- (16) 『フラウイオス・アッリアノス アレクサンドロス東征記およびインド誌 註釈編』（1996年
- (24)

- 大牟田章 東海大学出版会) の1244 ページ 1-(19)。以下、この文献は 大牟田1244 1-(19) のように略記する。
- (17) ガウガメラの会戦の最中には、ペルシア人騎兵が後方の糧秣車輛隊を攻撃した。無防備で武器武器をつけていなかった車輛隊は窮地に陥った。(Arr. III. 14. 3)
- (18) サイモン・アングリルム他『戦闘技術の歴史I 古代編』創元社 2008年 p. 6
- (19) 大牟田1267 1-(65)
- (20) 結局、テバイの戦後処理は同盟者に委ねられたあと徹底的に破壊された。(Arr. I. 9. 10)
- (21) タルススを脱出してダレイオスのもとに遁走したアルサメスの例。(Arr. II. 4. 6)
- (22) 湾岸戦争の際、クウェートから進撃した米陸軍の速度が速すぎて補給が追いつかなくなるという現象が起こった。(江畑 p. 20)
- (23) Peter Green, *Alexander of Macedon, 356-323 B. C.* University of California Press 1991 p. 311
- (24) 勝利を盗むつもりはないという有名なエピソードのためか、マケドニア軍は常に白昼堂々と正攻法で攻撃したというイメージがあるが、必要な時には夜陰に乗じてしばしば奇襲をしている。
- (25) ピエール・ブリアン『アレクサンドロス大王』(田村孝訳 文庫クセジュ 白水社 1991年 p. 33
- (26) たとえば、インドの山中では、象に関する情報を集めようとした (Arr. IV. 30. 6)
- (27) John D. Grainger, *Alexander the Great Failure*, pp. 72, Continuum, 2007
- (28) 『アレクサンドロスの父』原随園 新潮選書, 1974年 p. 238
- (29) 大牟田(1557-1558) は、アリンマスに指示されていた糧秣の集積は、ダレイオスとの最終決戦をひかえたメソポタミアへの本格進攻にあたって兵站上不可欠の前提であったという。
- (30) 糧秣の調達責任者はクラテロスとコイノスであったと思われる。
- (31) この敗戦に懲りたのか、アレクサンドロスは部下のコイノスに十分な兵力を与え、ソグディアナに冬営させた。
- (32) Bosworth p. 142.
- (33) マケドニア軍の密集歩兵部隊 (*ψάλαγγις*) は5.5~6メートルの長槍(サリッサ)を武器とした。大牟田1240 1-(15)
- (34) インダス川を渡す橋が、船を連ねたものであろうというのはアッリアノスの推測である (Arr. V. 7. 1)
- (35) アッリアノスによるマケドニア軍の戦死者の数は、ペルシア軍の戦死者とくらべて非常に少なく記述されており、信憑性は低い。同様にルフスの戦死者に関する数字も過少である。例えば、イッソスの戦いで「ペルシア軍側で戦場に倒れたものは歩兵10万、騎兵1万であった。一方、アレクサンドロス側では負傷4千5百、歩兵のうち全部で三百二名が行方不明、騎兵は百五十名が死亡した。これだけの犠牲で巨大な勝利が得られたのである」(ルフス46)。
- (36) *The Genius of Alexander the Great* N. G. L Hammond 1997 The University of North Carolina Press P 1.
- (37) 本書の学説史的な位置づけは、『西洋古典学研究』58号(2010) pp. 141-144の岡田泰介氏の書評を参照。
- (38) 森谷公俊『アレクサンドロス大王「世界征服者」の虚像と実像』講談社2000年 20ページ
- (39) Cartledge p. 12.
- (40) ハメル p. 39
- (41) 1タラントンで裁判員を買収して死刑を免れようとする例。ハメル p 39
- (42) ルフス11の注(15)
- (43) 長沢 p. 47

参考文献

- A. B. Bosworth *Conquest and Empire* Cambridge University Press 1988
- Donald W. Engels *Alexander the Great and the Logistics of the Macedonian Army* University of California Press 1978
- N. G. L. Hammond, *The Genius of Alexander the Great*, The University of North Carolina Press 1997
- Paul Cartledge *Alexander the Great: The Hunt for a New Past* Macmillan 2004
- Peter Green, *Alexander of Macedon 356-323 B. C.* University of California Press 1991
- Pierre Briant, *Alexander the Great and His Empire* Translated by Amelie Kuhrt Princeton 2010
- Philip Freeman, *Alexander the Great*, Simon & Schuster Paperbacks 2011
- エドヴァルド・ルトヴェラゼ『アレクサンドロス大王 東征を掘る』帯谷知可訳 日本放送出版協会 2006年
- 江畑謙介『軍事とロジスティクス』日経BP社 2008年
- サイモン・アングリム他『戦闘技術の歴史I 古代編』創元社 2008年
- 櫻井悠美『古代ギリシアにおける女と戦争』近代文芸社 1998年
- デブラ・ハメル『訴えられた遊女ネアイラ 古代ギリシアのスキャンダラスな裁判騒動』藤川芳郎訳 草思社 2006年
- 長沢和俊編『アレキサンダーの戦争』講談社 1985年
- 原随園『アレクサンドロスの父』新潮選書 1974年
- ハリー・サイドボトム『ギリシア・ローマの戦争』吉村忠典・澤田典子訳 岩波書店 2006年
- ピエール・ブリアン『アレクサンドロス大王』田村孝訳 白水社 1991年
- 『フラウイオス・アッリアノス アレクサンドロス東征記およびインド誌 本文編』1996年 大牟田章 訳注 東海大学出版会
- 『フラウイオス・アッリアノス アレクサンドロス東征記およびインド誌 註釈編』1996年 大牟田章 註釈 東海大学出版会
- ヘロドトス『歴史』(下) 松平千秋訳 岩波文庫 昭和47年
- ロビン・レイン・フォックス『アレクサンドロス大王(上)』青土社, 2001年